

(2) 生活単元学習による実践

(1) 取り組みについて

生活単元学習は、目的意識を持ち、具体的な活動を通して意欲的に取り組むことをめざした指導形態である。コミュニケーションに視点をあてて考えれば、「人との関わりを大切に活動させきる場」を保障する大切な学習である。この学習の中で、生徒達に、自分の思いや考えをどんどん出させ、人との関わりを楽しさを味わわせる中で、コミュニケーションの素地を培っていききたい。

今年度、生活単元学習に取り組むにあたり、コミュニケーションに視点をあてた授業づくりの観点に従って、次のような点に配慮しながら学習を進めた。

① 単元や題材の設定及びその配置

目標や内容が一つの単元で途切れることなく、繰り返しや発展で積み上げられるようにした。例えば、「野外炊飯」での経験を生かし「ミニキャンプ」へとつなげた。また「ミニキャンプ」での学級を解いた縦割りグループでの活動を「大山林間学校」でも採り入れ集団の中での関わりを深めた。さらに「大山林間学校」での学習内容を発展させ学習発表会での創作劇「大山物語」に取り組むなどの成果がみられた。

また、校内だけの活動に留まることなく、校外へも機会あるごとに出かけていくなど、コミュニケーションの場や対象の拡がりにも留意した。

② 指導者の関わり方

生徒の思いを十分に読み取り対応するために、また、生徒が集団の中でできるだけ自主的に関わっていくために、教師は必要以上の手出しはせず集団のなかまの一人として参加しながら見守るよう心がけた。

③ 個を生かす指導の工夫

学部合同、学級、学級を解いた縦割グループ等、個を生かせる多様なグループ編成の工夫に心がけた。縦割りグループの赤、黄、緑班については、体育の学習での異質グループを生かしたが、それぞれの班に特徴が表れ、結果的にはその特徴が十分に活かされる取り組みが展開された。

赤班——じっくりと班員の意見を聞く班長のもと、決定に時間を要するが、着実に取り組む。

黄班——話し合いや活動に先生の援助を必要とするが、指示があれば素直に取り組む。


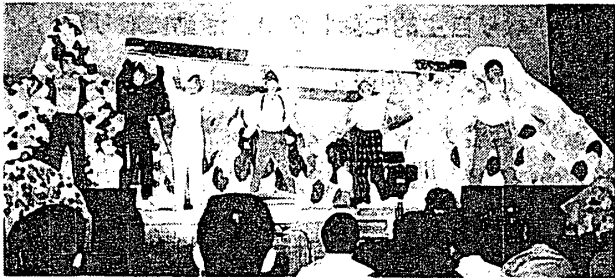
緑班——リーダー性を発揮できる生徒がおり、かなり自主的に話し合い、活動に取り組む。

また、それぞれの単元で、全体の目標と共に、個人のめあても設定し、生徒にも意識させていった。個人のめあてに対して、学習の様子を記録していき、変容の姿が追えるようにした。

④ 家庭との連携

学習内容について、生活ノート・学級だより等で知らせ、事前に準備させてきたり、学習したことを家庭でも実践し定着させるよう努めた。

次に示す表は、本年度中学部でコミュニケーションに視点をあてて実践した主な生活単元学習の内容である。

単 元	実 践 の 概 要	コミュニケーションの場や対象
5月 野外炊飯	何もない松林の中で野外炊飯をするために、必要な用具を作ったり調理の練習をしたりして当日を迎えた。当日はその成果を発揮し、協力して調理をし、各学年で楽しく会食した。	<ul style="list-style-type: none"> ・導入、招待炊飯（学部合同） ・準備・練習（学級） ・当日（学部合同及び学級、公民館の人との関わり） ・反省（学部合同） ・まとめ（学級）
7月 ミニキャンプ	<p>この単元で、初めて縦割りグループを取り入れ、調理・出し物・テント張りの練習等に取り組んだ。当日は雨となり、体育館でのテントにかわる基地作りを楽しんだ。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入（学部合同） ・準備・練習（縦割り班） ・当日（学部合同及び縦割り班、校内で実施） ・反省（縦割り班、学部合同） ・まとめ（学級）
10月 大山林間学校	ミニキャンプでの班活動をさらに継続して取り組むことになり、出し物・調理・挨拶練習やお土産準備の他に班独自の活動も見られ始めた。赤班のスケッチ、黄班の石地藏や前かけ作り、緑班のオリエンテーリング等である。宿泊学習や大山林間学校当日は、班行動の時間が多く設定され、自分達の立てた計画に沿って活動した。	<ul style="list-style-type: none"> ・導入（学部合同） ・準備・練習（縦割り班） ・係活動（係） ・宿泊学習（学部合同及び縦割り班、校外学習での校外の人との関わり） ・当日（学部合同及び縦割り班、大山自然科学館、大山寺、共同研修所、牧場、レストランでの校外の人との関わり） ・反省（縦割り班、学部合同） ・まとめ（学級）
11月 学習発表会	大山林間学校での学習を生かし、劇「大山物語」に取り組み発表した。	<ul style="list-style-type: none"> ・導入、配役決定（学部合同） ・パート練習（パート） ・全体練習（全体） ・準備（学級） ・当日（学部合同、大勢のお客様の前での発表） ・反省（学部合同） ・まとめ（学級） 

これらの実践は、2月の「お客様を迎えよう」の大単元につなげていきたい。次に、「野外炊飯」「ミニキャンプ」「大山林間学校」の各単元について、詳しく実践例を述べてみたい。

(2) 【野外炊飯】における実践

① 少ない経験をもとに着実に歩ませた1年生の実践

a 取り組みに対する基本的な考え

中学部1年は、4月下旬の校内宿泊学習を終えて、集団での学習がなんとか可能になってきた。事前の聞き取りでは、キャンプ・林間学校といった行事を通して、野外での調理を経験している生徒がほとんどであった。しかし、経験の回数や野外炊飯に必要と思われる技能習得の度合いもまちまちであった。そこで、次のような方針で望むことにした。

- 下見に行ったり、2年生・3年生の活動を見たりして、自分たちなりのイメージを創らせる。
- 大掛かりな準備は避け、必要最小限の準備に止める。
- 学習では個別作業と集団作業とを取り入れ、集団作業の場面では、生徒のつぶやき・ささやきといった表出も聞き逃さず、生徒の思いを学級の活動に生かしていく。

b 実践の概要

初めて経験する野外炊飯で、イメージをふくらますにしても生徒一人ひとりの判断材料や経験が少ないといった事情がある。しかし、少ない材料や経験をもとに何か工夫ができないか、これが単元のオリエンテーションでの課題であった。学級での話し合いを経て次のような学習を展開した。

- 現地の下見………4月校内宿泊学習での経験を生かした下見
- 食器の製作………竹を利用したお皿とスプーンの製作
- 炊飯練習………校内宿泊学習の経験を生かし、メニューは今回もカレーライス
- 調理台兼簡易テーブルの製作……ベニヤ板1枚を板のまま、調理台兼テーブルとして利用
- 簡易なべつかみの製作……雑巾に軍手を縫い付けて、なべつかみへ転用

c 展開の様子

題材名	楽しんで、豊かに人とかかわる姿
学級での計画	(賀露の松林は、何も無い所……という説明を受けて)「みんなで一度見に行こう。」(S男) 「うん、行こう。」(M男) (小学校や小学部での経験を生かし、調理のメニューを)「カレーライスがいいです。」(N男とK男) (先生に促されて)「サラダがいいです」(L男) (前時の招待炊飯を思い出して)「かまどには石を使おう。」(M男) (教育実習生による野外炊飯を思い出して)「なべつかみを作ろう。」(S男)
松林の見学	「草が多いなあ。」(S男) 「まきをいっぱいもってこんといけんなあ。」(M男) 「スコップがいるなあ。」(M男) 「トイレはどうするのか。」(N男) (手頃な石を見付け)「かまどには、この石を使おう。」(M男)
炊飯練習	(ご飯担当になり、なんとかはんごうで米をとげるようになった姿を誉められると) 「へへ、ぼくは、米をとぐのがうまいでしょう」(とにかく顔を合わせた先生に自慢しまくるH男) ※H男の実践については106頁参照。

d 実践を終えて

野外炊飯当日、朝から「穴を掘るので、どうしても長靴を準備する。」とあって現地まで持参したM男。「来年はまきの量を減らそう。」といった見通しを立てていたS男。「外で食べるカレーライス

はうまい。」とってたくさんおかわりをしたH男。このような思いが表現されるのは、単元を通して、自分の思いや願いが仲間聞いてもらえると実感をしたことによると考えられる。

② 昨年度の経験を生かしながら話し合い、活動させた2年生の実践

a 取り組みに対する基本的な考え

2年生は、昨年度野外炊飯を経験しており、その経験を生かしながら自分達で内容や日程について計画を立てさせ活動させたい。また、それぞれの活動で目的意識を持たせ、課題解決の方法を生徒どうしで話し合いながら活動させることにより、友だちどうしのよりよい関わりをめざした。

b 実践の概要

学部合同学習での野外炊飯の導入、1年生を招いての招待炊飯を経て、当日を迎えるまでの学級での主な学習は次のとおりであった。

活 動	内 容
1 計画の話し合い	・昨年度のことを思い出しながら立案
2 野外炊飯の準備・練習 ・昨年度と同じ活動を繰り返す。 ・昨年度作った物を生かす。 ・新しい取り組みをする。	・まき作り ・台ふき作り ・竹コップ作り ・昨年度作った椅子、はし、テーブルクロス <small>の修理</small> ・カレーうどんの調理練習 ・なべしき作り ・食器作り

c 展開の様子

生徒たちは、自分たちで立てた野外炊飯の計画に従い、次々と準備を進めていったが、その中でも、特に仲間意識を持ち励まし合いながら取り組んだと思われるのがまき作りである。2班に分かれて活動させ、まきの量が分かるように班毎にシールを貼りながら進めさせた。その結果、お互いに競争意識が生まれ、班内で、「早くしようで。」「こうしたらいいよ。」等の声かけをしながら協力しあう姿が見られた。



まき作りの様子

野外炊飯当日は、晴天に恵まれ、野外でのびのびと今までの準備・練習の成果を発揮することができた。また、まとめの学習では、一番心に残ったことをひとりずつ話させ作文に書く内容を焦点化させたり、自分で文の書けない生徒には当日の写真を見せながらつぶやきを聞き取ったりする工夫をした。

d 実践を終えて

この単元は、目的に向かって創意工夫しながら、様々な活動が取り入れられるよい単元ではあるが、活動させることにのみ追われがちな面もある。学級での話し合いのさせ方や、よりよいグループやペアーの組み方を検討し、さらにコミュニケーションに視点をあてた取り組みとしていく必要があると感じた。小さな事でも、お互いに知恵を出し合いながら、取り組んでいく中で、様々な関わりが生まれるように思う。


③ 一人ひとりの思いを大切にしながら、更なる工夫、新しい取り組みをした3年生の実践

a 取り組みに対する基本的な考え

3年生は、昨年、一昨年と2回「野外炊飯」を経験している。過去、野外炊飯の為に製作してきた物も多く、野外で御飯を炊く経験は豊富である。そこで、過去、製作した物や、経験を財産として、利用できる物は利用し、更に工夫できることはないかと考えた。

b 実践の概要

合同生活での野外炊飯結団式、招待炊飯を経て、当日を迎えるまでの学級での学習内容は下記の通りである。

活 動	内 容
1 計画の話し合い 2 炊飯の準備・練習  竹カップ作り	○当日までの日程、メニュー決め、準備物、炊飯練習の計画 ○過去の財産を活かしながら、工夫する取り組み ・テーブル・椅子の補修→2年生の時に製作した物を利用 ・割箸作り→昨年までの経験+工夫 ・竹カップ作り→昨年までの経験+工夫 ○新しい取り組み ・フライ返し作り→新しいことへの挑戦 ・かまど作り→新しいことへの挑戦 ・炊飯練習（お好み焼き）

c 展開の様子

3年生は楽しみにしている修学旅行の行き先が広島なので「お好み焼き」を作ろうということになり、お好み焼きをうまく焼くにはフライ返しがいることが炊飯練習でわかった。また、1・2年生の時には穴を掘ったり、石を組んだりしてかまどを作っていたが、火力調節が簡単に出来、持ち運びのできる物ということで、U男が、一斗缶を父親が使っていたのを思い出し、みんなに伝えたところ、話し合いの結果、3年生は缶のかまどを作ることになった。また、今までのような竹を割っただけの箸やコップではなく、割箸にしたり、取っ手を付けるなどの工夫も話し合いの中から生まれた。

3年目で初めて好天に恵まれ、実際に野外で炊飯を行えたことは、事後の作文を書かせても、生徒達にとって良い思い出として残っている。

d 実践を終えて

1年・2年と同じメンバーで、自分達の情報交換等は出来ると思っていたが、K男は缶を開ける為に缶切りが使いたかったのを先生にさえ伝えることができず、缶を金切りばさみで開ける仲間を前に、じっとしゃがみ込んだままであった。このことは、自分の考えを言葉にして相手にはっきりと伝えないと、自分の思い通りにならないことをK男は身にしみて理解したことだろう。このことは、我々教師自身にとっても自分達の指示やアドバイスが生徒達にうまく理解されているかどうかの反省を迫るものであった。

(3) 「ミニキャンプ」「大山林間学校」における実践

① みんなの意見を取り入れながら、一步一步地道に取り組んだ赤班の実践

[ミニキャンプ]

a 取り組みに対する基本的な考え

赤班は、中3 T男、中2 I男、Z男、R子、中1 L男、G男、S男の7名のメンバーである。「ミニキャンプ」は、「野外炊飯」の発展として設定されている単元であるが、中1の生徒が3名もいることから、昨年度までの経験を生かして中3、中2の生徒にリーダーシップをとらせ、生徒の自主性を大切にして取り組ませることにした。

班長は、立候補しみんなに選ばれた中2のI男になった。I男は、自分の考えをしっかりと持ちながらメンバーひとりひとりの気持ちも大切に、真面目にコツコツとがんばろうとする生徒である。I男のリーダー性を育てながら、他の生徒の特性をも生かしながら場を設定するという方向で、赤班の活動は始まった。

b 実践の概要

全体での結団式を受けてから、班の結団となり、その後は、班ごとの活動が中心となった。I男を中心とした話し合いが始まった。赤班の特徴は、「話し合いにとっても時間がかかる」ということである。理由は、班長I男が、必ず一人ひとりに意見を言わせ、確認、説得をしてから決定をするためである。その結果、メンバーは、自分の意見を一応認めてもらったことに満足し、班長の進行に素直に従った。赤班の主な活動は次の通りである。

- ・テント張り（全体指導後に、班だけで練習したが、時間が足りなくて昼休憩にも行った）
- ・野外炊飯（初めて作る「ハヤシライス」なので、雨降りの中、傘をさして最後まで行った）
- ・出し物練習（決定に時間がかかり、練習は休憩時間に行った）
- ・当日（全体の進行に沿って活動できたが、全体的に「ぼちぼち」やっていた）

赤班は、全体的にスローペースではあったが、ひとつひとつの活動を確実にやり、一步一步こなしでいった。場面ごとに係になった生徒が活躍した。

c 展開の様子

当日の主な活動の様子として、「基地作り」と食事作りについて述べる。

〈基地作り〉

雨のため、体育館にテントに代わる「基地」を作った。初めはI男がリードしていたが、I男自身が考えに詰まってしまうと、全体に指示ができなくなった。こだわりの強いT男が、G男とZ男をリードして隣りにもう一つ「基地」を作り始めた。コミュニケーションのとりにくいG男だが、T男の「G男君、○



重いテントをみんなで運ぶ赤班

○して。△△持って。」という具体的な指示に素直に従い、協力していた。何をしてよいかわからず、ぐずぐずしていたZ男も、T男の指示に従っているうちに、自分の考えを出して「基地作り」に工夫をし始めた。I男とS男は、初めに作っていた「基地」を引き続いて作り、T男たちの「基地」と合体させた。S男は自分の考えであれこれ工夫してみるが失敗することが多く、最後は先生に助けを求めている。ウロウロしているL男に、I男とS男が声をかけるが、L男は「基地作り」に全く興味を示さず、ほとんど活動しなかった。一人ひとりが「作る」ことに夢中で取り組んでいた。

〈食事作り〉

「私がいっしょにしなければ」という自覚のあるR子は、はりきって大きな声でみんなに指示をしていた。「よくわかるように」「やさしく」教えてあげようと自分のめあてを時々思い出しながらよく働いた。I男、G男は「R子さん、何をしたらいいですか？」とたずね、Z男、L男がぼやっとしているとすぐにR子に「○○して下さい。」と指示されていた。T男とS男は一生懸命に火の番をした。R子のリードで、食事作りと片づけはてきぱきと早くできた。このことはR子の自信につながった。

d 実践を終えて

初めての縦割り班での活動で、「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤を繰り返して時間が足りなくなることが多かったが、みんなが前向きに取り組んだ。楽しかったというより、係としての責任や班全体の協力という点において、「えらかった」という思いの方が強かったようだ。しかし、自分の役目を果たした満足感も大きく、その意欲と自信と共に、反省点をも「大山林間学校」につなげたいと考えた。

〔大山林間学校〕

a 取り組みに対する基本的な考え

「ミニキャンプ」での実践をもとに、充実した班活動をさせたいと考えた。係は生徒自身の希望で、ほぼ「ミニキャンプ」の時と同じであった。「今度こそ」「もう一度」という生徒の気持ちが感じられた。「ミニキャンプ」でいっしょに活動し、お互いの性格や特長もわかってきているので、人間関係を重視しながら取り組んでいくことにした。班長I男は、「キャラボクの木のようにみんなをまとめる。」と決意し、班の名前も「キャラボク班」になった。また、班の目標も、出た意見をどれも取り入れて「みんなで協力して、ゆっくりでも最後までがんばろう。」と決めた。I男の自覚を大切にしていって、できるだけI男を中心に、活動するという考えで進めた。

b 実践の概要

「大山林間学校」に向けての取り組みは、ほとんどが班独自の活動にまかされていた。生徒は、途中に行われる校内合同宿泊も含めて、すべて自分達で計画した。全体的な見通しのもてるI男、S男が中心になって活動の流れを決めた。R子、Z男、G男は、自分の係の場面や知っていることについては積極的に意見を言っていた。T男は、出し物の歌を決める時に自分の意見を通そうとしたが、結局通らず、悔しそうにしていた。L男は、みんなにうながされて時々意思表示をした。こうして、赤

班の「一步一步地道に取り組んだ」大山林間学校の学習は進んでいった。

赤班の独自の取り組みの概要は、次のように展開していった。

c 展開の様子

《大山林間学校 事前学習 一》

どんな準備や練習が必要か考えて、計画した。次にあげているものが学習の中心となった。

- ・ 宿泊（決まりを守って宿泊する練習）
- ・ おみやげを買う（買い物、お金の学習）
- ・ レストランで食事をする
- ・ スケッチ
- ・ 山登り（体力作り）
- ・ 地図（鳥取県-東部・中部・西部）
- ・ 出し物練習

《校内合同宿泊学習 一 しいたけ栽培見学 一》

- ・ 食事材料の買い物
- ・ おみやげを買う
- ・ レストランでの食事
- ・ 公共の交通機関の利用（東部の地図）
- ・ 船岡→しいたけ栽培見学地→河原コースの山登り
- ・ 湖山池のスケッチ
- ・ 出し物練習
- ・ 朝食作り



※冷たく強い風の中で、みごとに紅葉した大山をスケッチした。
「寒いからやめる？」
「決めただけえ。」
「うー、寒い！」



※若桜鉄道に乗って因幡船岡へ。
「切符買うのまちがえたね。」
「いいよ。買い直したものだ。」
「ちょっと緊張しちゃうわ。」

d 実践を終えて

始めから終わりまで各班に運営をまかされた大山林間学校を終えて感じられるのは、生徒一人ひとりに責任感、協力、満足感、次回への期待の芽が伸びつつあるということである。学級とは異なるメンバーの中で中3としての自覚に支えられて、多少こだわりの減ったT男。地元を案内するというこ
とではりきって先頭に立ち、みんなをリードして、「〇〇はよかったが、△△はよくなかった」と正しく自己評価できたZ男。自分の係に責任を持ち、遅れがちになるL男に常に気を配りながら誘って
は一緒に行動したR子。自分なりの見通しをもって班をリードしたが、知らないことがあると困って
しまい、「Z男君、お願いします。」と先頭を譲ることの多かったI男は、最後の反省で、「情けない。
もう一度やり直したい。」と神妙に答えていた。班長の相談役、友だちの仲介役として、できるだけ
でしゃばらないように自分なりに考えて行動しようとしたS男。「先生とではなく、友だちと話そう、
友だちの話を聞こう」というめあてを決め、黙ってはいたが友だちの側にいることが多くなったG男。
学級とは異なるメンバーで外に出ることが多く、甘えや座り込みが多少減ったL男。

担任との連絡が取りにくい縦割り班での自主活動は、多くの課題も残したが、生徒自身にとって自分自身を見直すよい機会だったといえる。

② 生徒の興味・関心に対応しながら、少しずつ仲間意識を育てていった黄班の実践

[ミニキャンプ]

a 取り組みに対する基本的な考え

黄班の生徒は、表出言語をもち、ひらがなで書かれた文章を読む力のある生徒も多い。しかし、班を編成した初めの段階ではまだ名前を覚えていない仲間があったり、思いがあっても発言を遠慮するような雰囲気があったりした。また、話し合い活動になるとその場から離れがちな生徒もあった。そこで、黄班は学習の多くを話し合いの時間にあてるのは避け、からだを動かしての活動を中心にしてグループをまとめていこうと考えた。つまり、少しでも縦割り集団の仲間意識（特に班の中では何でも話し合える雰囲気）が育ったり、上級生にはリーダーとしての意識が育っていくことを考えて指導することとした。

リーダーとしての意識を育てるという面から、自発的に班長に立候補したK男（3年生）と女子のリーダーとして活動させたいH子（3年生）を、担任教師がそれとなく援助を行うという方針で臨むことにした。（尚、K男の実践については118頁を参照）

b 実践の概要

この単元のオリエンテーションでは、評価の基準として『できるだけ自分で考え行動できたか』『困ったときに班の仲間や先生に聞いたか』という点がとりあげられた。学級単位で活動した野外炊飯を発展させ、生徒の視野を学部全体に広げるねらいもあり、班でのやりとりをできるだけ増やしたい教師側のねらいもあって、黄班では班長のK男を中心に学習を進めることになった。下表に黄班独自の実践の概要を記す。

活 動	活 動 の 内 容
① 班の計画会	班の名前、目標、係分担、食事メニュー、当日までの活動計画の決定
② テント張りー1	テント張りのモデルを見学し、経験する。（第1回）
③ テント張りー2	前回の経験を生かし、黄班の仲間とテント張りに挑戦する。（第2回）
④ テント張りー3	第2回時より短時間にテント張りをする。（第3回）
⑤ 出し物計画	キャンプの出し物の計画を話し合う。
⑥ 出し物練習	話し合いをもとに出し物の練習をする。

c 展開の様子

テント設営に力を入れたのが、黄班の特徴といえる。しかし、テント設営技術の向上を目指すのがねらいではない。テント設営には班の仲間の協力が必要となる。そこには、リーダーが指示を出す場面があったり、他の生徒に対する応答の場面があったりする。『班長のK男を中心にして黄班の力でテント設営ができるようになれば』という願いを持ちながら学習を進めた。特にテント設営については次の表に記す。



テント設営（第一回）の様子

活 動	生 徒 の 様 子	教師のかかわり
テント張り①	(教師の設営風景を見たり、聞いたりしながら)「ポール。フライシート。ペグ。」と反復するH子。赤班のL男にいたずらをしかけるC男。設営の様子を見ないで、校庭をうろうろするH男。自分たちで設営を始めると、自分だけで行動しようとするK男。(ポールを2本つなぎ)「これでよし」とポールにしがみついたままのO男。 <結局、時間内には設営できず、教師の援助を受ける>	設営のモデルを見せる。設営のポイントを具体的に指示。説明が終わったら、声かけは控える。
テント張り②	前回の反省を生かし、ポールを3本つなぎ、しっかり支えるO男。(教師の具体的な指示を受けて)「A君は、ポールをもってください」「Hさんは、ペグを打ってください」「C君も、ペグを打ってください」と指示するK男。自分勝手に作業を進めていると注意を受け、少しパニックに陥るH子。 <今回もかなりの時間を必要としたが、前回より時間短縮。>	手順を1つずつ細かく指示する。K男へは指示の仕方を具体的に示す。

d 実践を終えて

当日は残念ながら雨天のため校庭にテントを設営できなかったもので、体育館でのテントに代わる「基地作り」では、これまでの技術を生かし、真っ先に「基地」を設営した。

学習をはじめた頃と比べると、班員同士の名前を覚えるなど、仲間意識が育ったように思われるが、リーダーとしての意識を高めることは課題として残った。

[大山林間学校]

a 取り組みに対する基本的な考え

ミニキャンプ、運動会と同じ縦割り班での活動を重ねるうちに、ようやくお互いの名前を覚え、少しずつではあるが同じ班の仲間なのだという意識が芽生えだした黄班。班長も引き続き中3のK男に任せ、これまでの活動でだんだんと育ってきている班長を中心とした班の仲間意識に依拠しながらこれまでの反省をもとに次の様な基本方針を立てて取り組んだ。

- ・班長のK男には、前もって学習についての打ち合わせをし見通しを持たせて取り組ませる。話し合い活動をはじめ、K男にはその場その場で具体的で短い指示や見本を示す。
- ・班独自の取り組みについては、班のメンバー、特にグループでの話し合い活動等が困難な生徒も興味を持って取り組める内容を考える。
- ・事前の班別学習については、個の実態に応じ、話し合い中心のグループと制作中心のグループに分かれて活動させ、お互いの活動内容を報告し合うような場も設定する。
- ・生徒一人ひとりが自分の思いを伸び伸びと言い合い班の活動を進めていけるように、十分時間をとる。

b 実践の概要

黄班では、前述のように生徒の興味、関心を生かし、また行き先の大山でなければできない活動ということで、大山の民話を読みきかせ、民話にでてくる地蔵に関連して石地蔵づくりや前掛けづくりを中心として活動した。

活 動	内 容
○ 班別学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班の名前、係分担、班目標、個人目標、学習計画の話し合い ・ 鳥取県の地理（3つの川と山） ・ 大山の様子や民話 ・ ワッペン作り ・ 出し物準備と練習 ・ 体力作りと乗り物の利用（校外学習－湖山神社まで） ・ 挨拶の練習とお土産準備
○ 校内宿泊学習	<ul style="list-style-type: none"> ・ しいたけ栽培地見学 ・ 乗り物の利用と時刻 ・ レストランの利用と買い物 ・ 食事作り・大山林間学校にむけて（石地藏作り、前掛け作り）
○ 大山林間学校 （当日）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 豪円山登山 ・ 班活動（阿弥陀堂見学、賽の河原での石地藏作り、前掛けかけ） ・ 大山自然科学館見学 ・ 大山寺での買い物 ・ 寿城見学

c 展開の様子

かなり具体的な指示が出されないと活動が難しいグループなので、班別学習時はまず班長が号令をかけてあいさつをし、学習計画表や板書を見てその日の活動内容を読みあげ、レクリエーション係（レク係）の2名が声をかけて班の歌「どんぐりころころ」を大きな声で歌う。その後、その日の活動に入るというのをパターン化した。そのことによって、やはり声かけは必要としたがかなりスムーズに班長のK男やレク係のM子、H男が班の友だちに指示を出すことができた。話し合いグループ5名の方は、班長の司会はほぼ先生のことばの模倣で進められたが、それぞれが自分の思いをその生徒なりの素直なことばで発表し合いながら進められた。中でもM子は自分なりの疑問をもち、たとえばワッペンづくりの時には「みんながドングリの形にせんといけんですか。」というような発言をしていた。それに対して中3のH子が「ドングリ班の仲間の印だから皆一緒がいいと思う。」というような的確を得た発言をし、M子を納得させていた。

更に、せっかくの校外に出る活動の单元なので、校外のいろいろな人と接しさせたいと考え、道をたずねる場面を設定するようにした。班の校外学習の時に湖山神社へ行く道をたずねさせたところ、班長のK男は尻ごみをしてしまったが、もう一人の中3のH子が勇気をだしてたずねることができ、全員が無事湖山神社に行くことができた。その結果、H子は、校内宿泊時も大山林間学校当日も「道がわからないなあ。」と誰かがいうと「私が聞いてくる。」と自分から言いたすようになった。



道をたずねる

また、班長のK男も話し合いを進めたり、校外に出た時に指示をだしたりすることはなかなかできず、言ったことが班の友だちに伝わらないことも多かったが、休みを利用して家族と大山に下見に行ったこともあって、大山林間学校の行きバスの中でマイクをとり長々と下見の話をしてくれた。また、大山寺でのおみやげを買う場面では、別行動をとろうとする班の先生や友だちを自分から制止するというようなこれまでのK男からは考えられない積極性が見られた。

d 実践を終えて

クラスの枠をといた縦割り班での活動は、普段クラスの中ではリーダーにならない生徒がリーダーを務めたり、黄班のゆったりとしたペースの中で自分なりの意見が言えた生徒があたりした点で、とくに有意義であったと思う。

③ リーダーを中心にみんなで話し合い、協力して取り組んだ緑班の実践

[ミニキャンプ]

a 取り組みに対する基本的な考え

ミニキャンプは、先の単元「野外炊飯」の発展単元として設定されている。緑班では、発展の内容を、学年割から縦割グループへ移ることによる人間関係の広がり、これまでの野外炊飯とミニキャンプの経験をもとにした生徒のより主体的な活動と考えた。この実現のために緑班では、リーダーを中心にみんなで意見を出し合って計画を立て、みんなの協力によって積み上げていくミニキャンプにしたいと考えた。つまり、生徒自身がコミュニケーションの舞台の主役になって活動を創っていくことを大切にしたいと考えた。

b 実践の概要

活 動	内 容
1 結団式 (合同)	・当日の日程、当日までの日程、班編成を知る。
2 班の計画会	・班の名前、目標、係活動、食事のメニュー、キャンプファイヤーのプログラム、当日までの活動計画を話し合い決める。
3 テント張り	・テントの張り方を知り、練習をする。
4 野外炊飯	・朝食作りの練習をする。
5 出し物練習	・出し物を話し合い、練習をする。
6 準備	・ミニキャンプに必要な準備をする。
7 当日	・ミニキャンプをする。
8 反省会 (合同)	・ミニキャンプの感想や反省を話し合う。



朝食のラーメン作り

実践の概要は上表の通りである。緑班では、班の計画を話し合う活動を生徒の主体性を生かした重要なコミュニケーション活動として位置づけた。以降の活動で、テント張りは技術を教える必要性から教師が設定したが、野外炊飯と出し物練習は生徒の話し合いにより計画された活動である。

c 展開の様子

ここでは、生徒のコミュニケーションの舞台となった計画会と出し物練習の展開の様子を述べる。

○班の計画会……班の名前「あんぱまん班」は、個々の好きなものの名前が活発に挙げられ、結局、多数決で決定した。班目標「わからないことは聞きながら協力する」は、「協力する」と「わからないことは聞く」という二人の意見を合わせたものである。班目標「テントを張る」は、一年生の意見であり、初めてのテント張りへの意欲を伺わせるものである。夕食のメニューのカレーライスとツナサラダは、先の野外炊飯の経験からの発想であり、朝食のラーメンは、好きな食べ物で手軽に作れるものという発想である。このように、自分の経験をもとに自分の意見を持ち、それを述べることで、また、多数決のルールを理解もほぼできた。しかし、障害の重い生徒は、経験の思い起こしや意思の表現が難しく、多数決の意味もよく理解できなかった。障害の重い生徒の意思や表現をどう引き出して活動に生かせばよいのか課題が残った。

○出し物練習……自分の経験や知っている歌や物語をもとに意見が出された。「うさぎとかめ」「あんぱまん」「三匹の子ぶた」「歌」の中から、多数決で、リーダーの提案した「三匹の子ぶた」に決まった。リーダーは、進んで「三匹の子ぶた」の本を先生に借りに行き、それをもとに家で台本を書き上げて来た。翌日、昼休憩に班のメンバーを集めて自主的に練習を始めた。お面作りも宿題に出された。メンバーから出た「お面は、どうしよう」の意見をリーダーがうまく取り入れた場面であった。このように、これまでの経験をもとに話し合い、生徒自身がコミュニケーションの舞台の主演となり、一つのまとまった自主的な活動がなされたことは、今後の授業づくりの大きな示唆を与えるものであった。

d 実践を終えて

1～3年の学級を解いた集団における人間関係の広がり、生徒の経験や意欲をもとにした話し合いによる主体的な活動をめざしたミニキャンプの取り組みであった。学年縦割集団では、人間関係を広げコミュニケーションの範囲を広げることができた。「ミニキャンプ」単元は、生徒の経験や意欲がベースにあったことにより、活動の見通しが持ちやすく、その内容がわかりやすかった点で、意見が出やすく話し合いに発展がみられ、コミュニケーションを深めることができた。

一方、障害の重い生徒を話し合いの中でどう生かしていくか、話し合いの場や環境作りをどう設定していくか、更に新しいリーダーをどう育成していくかという課題を「大山林間」につなげた。

[大山林間学校]

a 取り組みに対する基本的な考え

「大山林間学校」は、先の生活単元「ミニキャンプ」で力をつけてきた主体的活動や学部内の小集団（班）の広がりを学校外の人（他人）にも応用できるかどうか、いわば評価の単元として位置づけた。



豪円山登山

「よいしょ、よいしょ、あーえら」

活動としては、「ミニキャンプ」単元の考え方を踏襲しつつ、新リーダーの養成、話し合い活動の充実、障害の重い生徒の参加の仕方等を検討しながら、進めることにした。

b 実践の概要

活 動	内 容
1. 結団式	○当日の日程、当日までの日程、班編成を知る。
2. 班の計画会	○班の名前、目標、係活動、当日までの活動計画を話し合い決める。
3. 地図の学習	○地図の見方を知り、大山までバスで通る市町村名を覚える。
4. オリエンテーリング	○地図の見方と実際の地形の違いの確認をする為、学校周辺をオリエンテーリングする。
5. 宿泊学習の計画	○しいたけ栽培地までの交通手段、方法、料金、時刻等を考えて、1日の計画を立てる。
6. 出し物練習	○出し物の内容を話し合い、練習をする。
7. 宿泊学習	○宿泊学習の計画に従い宿泊学習をする。
8. 大山林間学校(当日)	○班で立てた計画や全体の指示で大山林間学校を過ごす。
9. 反省会	○大山林間学校の班目標や個人目標が達成できたがどうか反省する。

緑班の実践の概要は前表の通りであるが、教師側のこの単元で押さえない学習内容と生徒達の要求とのずれが大きかったので、教師も班員の一人として話し合い活動に加わり、生徒達の要求に沿うような形で計画された。

c 展開の様子

班の計画会での様子を以下に述べる。

- **班長決め**……「ミニキャンプ」で、班長という役が、どういう事をするのか解ったE男は積極的に班長に立候補した。しかし、3年生のY子と投票の形でY子に決まったので、2年生のE男はくやしがっていた。ミニキャンプの時班長だったU男は班長には立候補せず、自ら副班長というポストを希望し、班長選から落選したE男と争い、副班長になった。E男は、他の係がどんどん決っていく中、落ち込んで、教師の誘いかけにも自暴自棄になって「すれば…」「もういい。」等の発言を連発していた。
- **班名決め**……Y子が話し合いを進める中、「あんばんまん」「おちば」「もみじ」「かき」等色々出てきた。しかし、Y子は、意見を出させる力はあるが、意見をまとめることが出来ず、ややもするとU男が自分で意見をまとめようとした。

M男が意見を求められて「ぎん」と言った。どういう理由で「ぎん」と言ったのか質問が殺到したが、彼は連合運動会の優勝カップを指さしながら「銀色だから」と答える。するとU男がここでも、「いいなあ、それ…」と言い、教師が「銀は英語でシルバーだから、シルバー班はどうだ？」と提案すると一同が賛成した。

d 実践を終えて

ミニキャンプの時と同じ集団なので気心が知れているせいか、かなりまとまりのある行動が出来たと思う。障害の重い子に対してはカードを用意して二者択一の方法を取ることで対応した。

生徒達も、余り意見を言わない生徒に対しても発言の機会を与えるなど彼らなりに配慮していることが伺えた。ミニキャンプの時に課題となった新リーダーの育成も、副班長の助けを借り、班長としての自覚が芽生え、話し合いの進め方・まとめ方等の方法を班の中で学ばせることが出来た。

しかし、大山林間学校では、学校内の人から外部の人に人間的関わりを拡げようとする試みは、外部の人に出会う機会が「おみやげを買う」「食事を注文する」「研修所の人達に挨拶をする」等の時しか持てなかった。外部の人との関わりを持つ機会は、3学期の単元「お客様を迎えよう」で設定し、研究発表会に来られる先生方を相手に、自分の伝えたいこと、相手の言いたいことをうまく伝えたり、受け取ったりさせたいと思う。



シルバー班のメンバー



「おばさん、これ下さい。」